

環境医学 I

Environmental Medicine I

単位数：5 単位

○神田秀幸 教授：環境保健医学
久松隆史准教授：環境保健医学（公衆衛生学）

1. 科目の教育方針

主体と環境との相互作用という観点から、様々な健康問題、疾病の原因究明とその予防に取り組む研究について学習する。研究の方法は「人間レベル」を中心に、生活環境や社会文化環境を含め、人の取り巻く環境と医学医療との関連を検討する。様々な環境で起こる問題を解決するためには、歴史的背景を学習し、そこから得られた技術や経験を理解するとともに、社会集団として国際的あるいは社会的なルール・制度・仕組みを把握することも重要である。問題解決とリスク低減のために、マクロ的視野および環境共生の枠組みに立った展開ができることを学習の狙いとする。環境医学 I では総論的な内容を主とし、概念や枠組み、社会制度等の理解を重視する。

2. 教育目標

一般目標 general instructional objectives

- 1) 環境と健康の関連性からとらえる研究テーマを開発する。
- 2) 生活習慣・生活習慣の健康への影響を評価する方法論を理解する。
- 3) 労働環境の実際的応用研究を理解する。

行動目標 specific behavioral objectives

- 1) 疫学研究について説明できる。
- 2) 生活環境と健康リスクについて説明できる。
- 3) 働くことと健康について理解できる。

3. 教育の方法、進め方

担当教員による講義を主としながらも、発言や思考時間を設けた双方向型の授業展開を行う。また、テーマによっては、学生によるプレゼンテーションやグループ討論を行い、学生自身が主体的に考える機会を設け、問題解決型思考を養う学習を行う。

4. 成績評価の方法

学生によるプレゼンテーションの内容や表現、グループ討論への取り組み状況、課題レポート等を用いて、総合的に行動目標の達成度を評価する。

5. 使用テキスト・参考文献

- 1) 厚生労働統計協会編：国民衛生の動向、厚生労働統計協会、2014/2015
 - 2) JM Last 編：疫学辞典、日本公衆衛生協会、2000.
 - 3) KJ Rothman：Modern Epidemiology third Edition, Lippincott Williams&Wilkins, 2008.
 - 4) B. ラマツツーニ著、松藤元訳：働く人々の病気、北海道大学出版会、1980.
 - 5) 和田攻監修：産業保健マニュアル（第6版）、南山堂 2013.
- ※他、適宜文献、資料などを配布する。

6. 教育内容

回	授業内容	担 当
1	疫学 総論	神田秀幸
2	疫学方法論（1） 記述疫学	久松隆史
3	疫学方法論（2） 分析疫学（症例対照研究）	久松隆史
4	疫学方法論（3） 分析疫学（コホート研究）	久松隆史
5	疫学方法論（4） 介入研究	久松隆史
6	疫学方法論（5） スクリーニング	神田秀幸
7	疫学方法論（6） 臨床疫学	久松隆史
8	生活環境と健康（1） 空気・水・騒音・気圧と健康	神田秀幸
9	生活環境と健康（2） 放射線と健康	神田秀幸
10	文化環境と健康	神田秀幸
11	社会環境と健康（1） 社会制度における保健医療	神田秀幸
12	社会環境と健康（2） 保健医療政策と人々の健康	神田秀幸
13	労働環境と健康（1） 労働衛生管理体制と働く人の健康	神田秀幸
14	労働環境と健康（2） 産業中毒とその対策	神田秀幸
15	労働環境と健康（3） 産業医・産業保健スタッフの役割	神田秀幸